

# 『グロリアス —世界を動かした女たち』

監督：ジュリー・テイモア

脚本：ジュリー・テイモア、サラ・ルール

出演：ジュリアン・ムーア／アリシア・ヴィキャンデル／  
ティモシー・ハットン／ジャーネル・モネイ／ベット・ミドラー

2020年／アメリカ／147分



公式サイト

『グロリアス—世界を動かした女たち』配信中  
発売元・販売元：キノフィルムズ/木下グループ  
© 2020 The Glorias, LLC

## 社会を旅する シネマ

きつと もっと 近くなる  
きつと もっと 知りたくなる

「うちでは女性は調べ物担当だ」。本作の主人公、グロリア・スタイネムがジャーナリストとしてのキャリアを歩み始めた1960年代のアメリカでは、そんな言葉が平然と発せられていた。男性の同僚からコービー係のように扱われたり、ファッションやデートといった「女性向け」のテーマばかり渡されたり。対等に扱ってもらえず、差別的な言動にさらされ続けても、グロリアはあきらめることなく政治的・社会的な問題の現場へと取材にくり出していく。

その中で女性解放運動とも出会った。自身も演説で直接的に声を発するようになり、さらには仲間たちと雑誌も発刊する。未婚女性と既婚女性を区別しない新しい敬称として当時広まり始めた『Ms.』がタイトルだ。

「書く」と「話す」を通じてアメリカにおける女性解放運動を支え続けたグロリアは、現在も90歳で現役。そんな彼女の人生を本作は幼少時代からたどっていく。その歩みは彼女自身の「私たちの闘いはマラソンではなくリレー」という言葉がびったりだ。

たとえば母の存在。グロリアが幼い頃から精神的疾患を抱え、介護が必要だった母。しかし結婚前には新聞記者だったと知る。男性の名前でしか記事を出すことができなかったというが、それでも母が結婚や出産を選択しなければ華々しいキャリアを歩めたのではないかとグロリアは葛藤する。そんな母からのバトンがひとつ。



## 米国の女性解放運動の先駆者 「私たちの闘いはリレー」

アーヤ藍

一方、常に旅をしながら行商をしていた父からも大きく影響を受けたグロリア。固定観念に縛られず、世界の多様さを知っていたからこそ、「語られていない物語」を見つけ、その声を聞き、書いて可視化することに強い思いがあった。グロリアは黒人やネイティブアメリカンの女性たちにも耳を傾け、彼らから学び、ともに声を上げていく。そんな横の出会いからのバトンもひとつ。

他にもグロリアの周囲の人たちからの印象的な言葉（バトン）が本作には散りばめられている。当時違法だった中絶の経験者に声を上げてもらおうというとき、仲間のひとりが発した言葉もそのひとつだ。「1人がやれば違法でも、1,000人がやれば運動になる」。この言葉のように、時代や地域、バックグラウンドの違いを越えて、バトンがつなぎ続けられ、東ねられていくことで社会は変わってきたのだろう。グロリアを複数形にした原題からもその思いを感じる。

そして、そのバトンは一人ひとりを支える力にもなる。本作ではグロリアが、フェミニストに対する揶揄する言葉や攻撃的な発言に悲しみを覚え、孤独を感じている姿も描かれる。誰しも「強い」だけのはずはない。傷つき、悩み、悲しむ心がある。だからこそ仲間の存在は大きい。グロリアの「神が細部に宿るとすれば、女神は連携に宿るのです」という言葉のとおり。

アーヤあい：映画探検家。1990年生。慶應義塾大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことをきっかけに、社会問題をテーマにした映画の配給宣伝を行うユニテッドピープル(株)に入社。同社取締役副社長も務める。2018年独立、映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。

